

三島由紀夫『潮騒』論

有元伸子

【キーワード】潮騒・三島由紀夫・ジェンダー・セクシュアリティ・語り

はじめに

「潮騒」は、昭和二九（一九五四）年六月に、書き下ろし小説として新潮社より刊行された。清新な青春小説としてベストセラーとなり、映画化も五度を数えるほか、各国語に翻訳され、三島由紀夫の代表作として長く愛読され続けている作品である。このように一般的な知名度が高く愛好者も多い作品ではあるが、一方で三島作品における位置づけや評価という点ではやや微妙である。高評もあるが、「認識と行為」といった三島文学が扱うメインテーマからは外れる通俗小説であるとか、作り物としての限界を述べる批評も多いのだ。

後述するように、三島自身も「潮騒」については他作品との違いを認めているのだが、三島作品の系譜の中へどのように置けるのかについては再考の余地がある。また、この作品については、三島のギリシヤ体験やギリシヤ古小説であるロンゴス「ダフニスとクロ

エ」との比較もなされ、モデルとなった神島の現地調査等も近年行われてきている。さらに、結末部分がそれまでの作品の流れを遮断しているのではないかという指摘もあった。

本稿では、これらの先行論を参照し、三島の発言を踏まえながら、「潮騒」の〈特異性〉を、性（ジェンダー／セクシュアリティ）と語りの観点から考察していきたい。「潮騒」の語り手がどのように異性愛の物語を構築し語っているのか、舞台となった歌島の仮構や結末部などを検討した上で、小説「潮騒」を、〈特異性〉の縛りから解きほぐし、三島文学の系譜の中に配置し直してみたいと考えている。

一 「潮騒」執筆前後の三島由紀夫

「潮騒」執筆前後に三島が繰り返し述べているのは、この小説が、直前に書かれた「禁色」（昭和二六―二八年）に代表されるこれまでの彼の作品とは異なり、《既成道徳》の側に立って描いた《幸福

な物語』だということである。たとえば、単行本「潮騒」の「あとがき」では次のように言う。

《私は一篇の牧歌小説を書かうと企て、わがアルカディアを描かうと試みた。いふまでもなく現実の日本のその地は既成道徳が生き永らへてゐるところである。「禁色」二部作によつて、既成道徳との対決の困難を味はひつくした私は、今度は悪魔が仏陀に化けるやうに、私自身、私の敵手である既成道徳に化け變つて、小説を書かうと発心したのである。そこでこの小説は反ロミオとジュリエットのなものであり、既成道徳の帰依者たち乃至は適応者たちの幸福な物語であり、どの一頁にもデカダンスの影もとどめぬ小説であり、考へられるかかぎりの「作者不在」の小説たるべきであつた。》

「潮騒」で描いたのは、二人を引き裂く世間に抗する悲劇的恋愛ではなく、世間から祝福されるべき《既成道徳の帰依者》たちの幸福な愛の物語だといふのである。三島文学の特色について、佐伯彰一は、《何らかの心理的、生理的、また性的な弱点によつて、ノーマルな生活から、人間関係から隔てられ、拒まれている人物たちの、抑えがたい渴望、衝動という所に、三島作品の劇的な動力がすえられていた。『仮面の告白』の「私」におけるホモセクシュアリティ、また『金閣寺』の主人公における「吃り」など、いずれもそうした

顕著なそして小説的に成功した実例であり、一見例外人たる彼らに、人間的な手ごたえをあたえていたものは、じつはこうした、現実への飢渴、そこから生ずる必死の身もだえにも似た現実接近の努力ではなかつたろうか」と述べている。¹佐伯が指摘するように、三島文学の特質は、そのアウトロー性にあり、現実社会から疎外されていると感じた者の苦しみと自己を疎外する社会への抵抗を描くことにあるのである。この限りにおいて、作者自身が《既成道徳》の側に立つという「潮騒」は、やはり三島文学の中で特異な位置を占めると言えるだろう。

「禁色」と「潮騒」を対照的に捕える見方をもう少し呈示しておこう。「十八歳と三十四歳の肖像画」（昭和三四年）では、少年時代から自分を苦しめてきた《気質》の表現過程を自作の流れに沿って通観している。

《私の人生がはじまつた。私は自分の気質を徹底的に物語化して、人生を物語の中に埋めてしまはうといふ不逞な試みを抱いた。（「禁色」第一部 1951・第二部 1953）

こんな試みのあとでは、何から何まで自分の反対物を作らうといふ気を起し、全く私の責任に帰せられない思想と人物とを、ただ言語だけで組み立てようといふ考への擒になつた。（「潮騒」1954）

長く苦しんできた《氣質》とは、一般的には鋭敏な感受性だと捉えてよかろうが、〈同性愛〉指向に対する苦しみの謂だと見ることも可能だろう。橋本治は、『禁色』における《氣質》は、「同性愛への嗜好」とほぼ同義だった²とし、「仮面の告白」や「愛の渴き」では《愛する男を殺したい》という欲望として表れていることを指摘している³。こうした読解によれば、『何から何まで自分の反対物を作らうといふ気を起し』て書かれたという「潮騒」は、「仮面の告白」や「禁色」にみられた性の苦しみを反転させた知的遊戯的作品だということになるかもしれない。

同性愛に触れながら「潮騒」について書かれたものとして、他に「潮騒」の執筆中に川端康成に宛てた書簡が残されている⁴。

《僕はもう男色物は書きたいだけ書きましたから、これで打ち切り、今後は健康な小説ばかり書かうと存じますが、これからが本当の冒険で、綱渡りです。生命保険にでも入らねばなりませんまい。》(昭和二八年一〇月一七日)

《男色物は書きたいだけ書きましたから、これで打ち切り》と三島は書く。たしかに、「仮面の告白」「禁色」などの主要テーマだった同性愛は、「潮騒」以降、正面から扱われることはなくなる。《男色物》から《健康な》異性愛小説へと転じていったことについて、松本徹は、『この漁師の若者は、じつは女性恐怖からも同性愛からも

癒えた悠一(引用者注『禁色』の主人公)と言ってよいのではなにか》、『この作品を書いた、作家三島の内的な理由は、まさしくその健やかさにあつたと思われる。『禁色』が終わったところから先の、悠一のあるべき像を描き出したのである』と述べている⁴。興味深い指摘であるが、松本は同著のなかで「潮騒」について詳述はしておらず、この問題をさらに検討してみたい。

二 〈同性愛の純粋性〉から〈社会に包まれた異性愛〉へ

つづいて、「潮騒」刊行より一〇年後のラジオ番組「国語研究作家訪問 三島由紀夫」を聞いてみよう⁵。男女高校生が三島にインタビューしたもので、世故と遠慮のある大人と違い、聞き手が率直であるだけに極めて興味深い。やや長くはなるが、インタビュの結末部分を活字化しておきたい。

《男子高校生 　で、まあ、愛のことなんですけど。先生、なんかかなりとりあげていらつしやるように思うんですけど、同性愛ですね。ああいったものを、僕たち、非常に生理的な嫌悪でもって臨むんですけど。あそこに、先生は、愛の一つの完成されたものを見いだしているような気がしないでもないのですが、どうなんでしょうか。

三島 必ずしもそうじゃないけれども、つまり、愛の形つてものがね、公認されちゃうと純粋でなくなるということを、僕、

いつも考えますね。さっきも言ったように、たとえば「愛」っていうものが、あんまり今、世間で言われて、週刊誌で言われて、女性雑誌で言われてね、そして、その公然とした公明正大な「愛」を自分たちが持っていると考えるときにね、自然にその「愛」ってものが、世間の作った枠の中にはまっていることがあるでしょ。それはもう既製品ですよ、スーパーマーケットで売っている「愛」ですよ。だけど、同性愛っていうものは、許されないとか、世間から嫌悪の目で見られるとか、そういう恐怖感があるから、それだけ人間の愛の形として純粹であり得る、というような考えで僕は書いてきたわけだ。

最近、だけど必ずしも考えなくなってきた。というのは、同性愛自体も最近はかなりね、普遍化されてきて、そういうふうな目で見られなくなってきたところがあるでしょ。そうするともう、同性愛自体にも、非常に不純な形も混じればですね、それから孤独感も薄まって、だんだんそうでなくなってくるでしょうね。それは同性愛にとってはいいことだけど、文学にとってはだんだん面白くなることだね。

文学っていうのは、そういうふうにも、認められないもの、人から嫌がられるものとか、嫌悪されるものとか、のけものにされるものの中に純粹さを見つけて出してね、やっ

てって、それで人間の本当の姿を探そうと思うもんだからね。

男子高校生 たしかに多少、露悪的ですね。

三島 それは露悪的ですよ。一般から言えばね。大江君なんか非常にそれをやっているわけだね。大江健三郎なんか。

女子高校生 でも、「愛」っていうのは、当人たちが一生懸命になつて、自分たちは通俗的なものじゃない、自分たちは例外だつて気づいたとき、本物って言っているんじゃないですか。

三島 しかし、恋愛だつて思うものには、社会的な力がいつも働いていますからね。近松の恋人たちっていうのは世間から絶対に許されない愛でしょ、あの当時は。恋愛っていうのはそれ自体が許されないものでしょ。それで、心中しなきゃならないような、ギリギリの愛情ですからね。そうすると、社会と愛っていうのは、いつも対立する形のとときに美しいんですね。たとえ自分たちが恋愛的な愛だと思つても、たとえば二人がどっかのアパートへ逃げてですね、そこで生活ができれば、もうそれは「社会の中の愛」だよ。だけど、文学者って、昔からなるだけ社会の中のそういう愛って書きたくない、で来たわけだ。

僕の作品で、一つだけ例外は「潮騒」なんだけれども、社会の中で、完全に「愛」がね、包まれた愛の美しさっていうのがあるかどうかということを、あれで書いたわけね。他の、あれ以外の小説は、僕は全部、孤独な、社会からはじき出さ

れたようなものとしか扱ってないわけだ。「潮騒」の場合は、社会の方が、古代みたいな、そういう社会で、日本の農村に実際にあるかどうか、農漁村に実際にあるかどうかはわからない。そういうものを設定しといて、それから純粹さっていうものを、僕はくつつけたわけだ。

いつも、どっちかのその、バランス・オブ・パワーですよ
ね。恋愛ってのは。》

質問する男子高校生が同性愛嫌悪を公然と表出してはばからないことに、まず驚かされる。この高校生は、引用箇所以前にも、《女って考えるのかしら。》、《もともと考える能力に欠けてて、女性はそれでいい。》、《女性というのは、愛なんて考えずに、愛されるようにできている。》といった女性嫌悪な発言も繰り返しており、そうした発言が公共放送の中で許されていること、むしろそれが聴取者を代表する感覚だとされていることに、四〇年の時間の隔てを感じさせられる。現在でも内心同感している者はいるだろうが、セクシュアリティに関する理解が進み、カミングアウトが相次ぐ今、あからさまに標榜する者はさすがに少数だろう。このインタビューは、三島が活躍していた時代における社会通念、同性愛や女性への感覚を我々に再確認させてくれる好個の教材と言えよう。

エリート卵たる若い世代に、あからさまに投げかけられた同性愛嫌悪。三島も、引用部以前の男子高校生の女性蔑視発言に対して

は、《僕もどっちかというとその考えに近い方けど》などと調子を合わせていただけに、思いがけないところから《既成道徳》の強固さに直面し冷や水をかけられた気分だったのではないだろうか。そして、今日では同性愛への抵抗感は無くなりつつあることをやりとり指摘しつつも、同性愛が世間から糾弾されるものであるために《人間の愛の形として純粹であり得る》ために作品化したのだと語る。ここでは同性愛を扱うことを単なる性的指向の問題・セクシュアリティの問題だと回答することは許されないものであって、もちろん社会への抵抗という側面は真実ではあるだろうが、いくぶんかの韜晦を含まざるをえないだろう。

つづいて、文学が描く愛は社会への抵抗の形をとることで純粹になるのだと、同性愛というセクシュアリティから愛の問題へと一般化され、その延長上に、自分が描いた唯一の例外作品として「潮騒」が配置される。すなわち、「潮騒」とは、現実にはありえない《古代》のような社会を設定し、その《理想的社会の中に包まれた愛の美しさ》を描いたのだ、というのである。このインタビューでも、「潮騒」は、それ以前の同性愛をテーマとした作品を相対化するものとしてとらえられている。

社会の中に包まれた愛を描く「潮騒」成立に、三島が昭和二六―二七年の半年弱、初めての世界一周旅行を体験したこと、いわゆる《ギリシャ体験》があったことは広く知られている。初めて《眷恋の地》であるギリシャに降り立った三島の高揚感・恍惚感をつづつ

た紀行文「アポロの杯」（昭和二七年）なども、繰り返し引用されてきた。これについては別稿で詳述したいが、〈ギリシヤ体験〉が、鋭敏な感受性と性的指向の両面からなる《気質》に苦しめられ続けていた三島にとって、それらすべてを解放する陶醉が与えられたと表明していることだけは確認しておこう。さらに、竹松良明が、『三島の同性愛感覚の発露がギリシヤという又とない媒介を通して、今後の芸術世界の確かな開花を予言させている』と述べていることも留意しておきたい。⁶⁾

「潮騒」は、こうした解放感を与えたギリシヤからの帰国後、倉卒にお土産小説として書かれたものではなく、時間をおいて慎重な準備の末に書かれた小説なのである。ホモフォビアのある現在の日本という《既成道徳》社会において、社会の中に包まれた愛を描こうとすれば同性愛ではなく、異性愛として描くしかないだろう。「ダフニスとクロエ」の骨子を借りた牧歌的小説として、「潮騒」の世界は仮構されていく。

三 共同体・歌島の仮構

三島は、「潮騒」では、〈社会の中に完全に包まれた愛の美しさ〉を書いたと話していた。一方で『潮騒』の場合は、社会の方が、古代みたいで、そういう社会で、日本の《農漁村に実際にあるかどうかはわからない》とも述べており、モデルとなった神島そのものを写實的に描いたのではなく、歌島とは虚構された舞台であるこ

とも言明している。⁷⁾

新治と初江の関係が育まれていく「歌島」の仮構については既に諸氏の指摘があるが、それらも含めてまとめておく。

一つは、人と自然とが、新治と歌島とが、調和し一体化しているということだ。新治は、『若者は彼をとりまくこの豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じ』⁶⁾と語り手は言う。作中で、新治が《若者》と表現され、初江が《娘》《少女》と表現されるのも、固有名の常用による個性と内面の過剰な想起をはぎ取り、自然と一体化した人物の織りなす牧歌的物語の面を印象づけるためであろう。

歌島は、小説冒頭《歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である》^(一)と紹介される。《歌島に眺めのもつとも美しい場所が二つある。一つは島の頂きちかく、北西にむかつて建てられた八代神社である》。四辺を海に囲まれた孤島で島の自然と一体化した人々は、島にある八代神社の海神を厚く信仰している。主人公の新治もその一人であり、『いつかわたくしのやうな者にも、氣立てのよい、美しい花嫁が授かりますやうに！……たとへば宮田照吉のところへかへつて来た娘のやうな……』^(三)という物語冒頭での新治の祈願が、『神々の加護は一度でもかれらの身を離れたためしはなかつたこと』、『闇に包まれてゐるこの小さな島が、かれらの幸福を守り、かれらの恋を成就させてくれたといふこと』^(一六)として叶えられ、人が神に感謝することで物語の結構が整う。自然に包まれた登場人物たちが島の神の加護によって恋愛を成就させるのが、「潮騒」の

縦糸となつてゐるのだ。⁽⁸⁾

小説冒頭の歌鳥紹介では、《眺めのもつとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い灯台》(一)だとされる。灯台からは太平洋が一望され、遠く富士も望める。名古屋や四日市を入港・出港する船を見守る灯台は、四辺を海に囲まれ独立した島と外の世界とを結ぶ存在である。新治は、初江と遭つたのを契機に、《水平線上の夕雲の前を走る一艘の白い貨物船の影》(二)に《未知の世界》を感じ、外界への関心を持つことになる。物語の進展につれ、新治は、《島を離れたいと切に思つてゐる自分》(二四)に気づき、最終的に外洋に出て手柄をたてて戻ってきたとき、新治には《ふしぎな自足感》があり、《俺はあの船の行方を知つてゐる。船の生活も、その艱難も、みんな知つてゐるんだ》、《力の限り引いたあの命綱の重み》によつて《かつては遠くに眺めたあの「未知」に、たしかに一度、新治はその堅固な掌で触つた》(一五)と感じるのである。小説冒頭のテキストには、八代神社に象徴される、空間的に隔絶した小島の内にあつて神の加護のもとに充足した生と、灯台に象徴される、外の世界に出て行くこうとする願望とが埋め込まれている。歌鳥の自然と人の調和のモチーフのもと、新治にはその二つの要素が彫り込まれてゐるのである。

歌鳥の二つの要素を呈示しているのは語り手である。「潮騒」の語り手は、物語世界外にあり、新治や初江に寄り添いつつも、すべてを知悉して、物語を進行させていく。⁽¹⁰⁾語り手は自らの判断を饒舌

に述べるとともに、《すると少女の返事は、実に無邪気な返事だつたが、おどろくべきものであつた》(八)（傍線引用者、以下同じ）といった驚きの感覚を語る。《それから安夫が黙つてはじめたことは、何か義務観念にとらはれてゐるやうで、まことに可笑しかつた》(九)といった安夫や千代子への揶揄も示す。語り手は実体化されてはいないが、判断し感覚をもつたものとして作中に機能しているのである。そして、共同体の側によりそい、都会の側に近い安夫や千代子を揶揄しながら、語り進めていく。また、どちらかと言えば、神の加護や自然との調和を表層に、新治の外への指向は底流として、語つていくのである。

四 共同体に包まれた愛

とまれ、こうした二つの性格をもたされた歌鳥の中で、「ダフニスとクロエ」を翻案し、若者と娘の恋愛が始まっていく。初江と初めて会つた夜、《寝つきのよい新治が、床に入つてからいつまでも目がさえてゐるといふ妙な事態が起》こり、《一度も病気をしたことはない若者は、これが病氣といふものではないかと怖》(二)れる。恋というものを予め概念として知らない若者が、全く未知の体験として異性と直面する様子が描かれている。そのことがもう少しあとで説明される。《多くの刺戟に触発される都会の少年の環境とはちがつて、歌鳥には、一軒のパチンコ屋も、一軒の酒場も、一人の酌婦もなかつた》(二二)、《都会の少年はまづ小説や映画から恋愛の作

法を学ぶが、歌島にはおよそ模倣の対象がなかった。そこで新治は観的哨から灯台までのあの貴重な二人きりの時間に、何をなすべきであつたか、思ひ出しても見当がつかなかった（五）。無知で、本を読まない人物として設定された新治は、まったく未知の状態から恋へ入っていくのである。¹¹

こうした点で、これは、同じ作家の「仮面の告白」と対をなしていることが明瞭だろう。《浪漫的な物語の耽読から、まるで世間しらずの少女のやうに、男女の恋や結婚といふものにあらゆる都雅な夢を託してゐた》（二）「仮面の告白」の〈私〉は、例えばバスの車掌に対して全く肉感的な魅力を感じないにもかかわらず、いっばしの口をきいて同級生たちを驚かせる。あらかじめ知識として恋愛を知りすぎた〈私〉が、その後、精神的な愛のある異性への性欲を感じられず苦しむ様相を記述した小説が「仮面の告白」だったのである。¹²

「潮騒」に戻ろう。海岸での接吻のあと、二人は嵐の日に裸で抱き合う。名高い観的哨の焚火の場面である（八）。ところが、二人の関係は、肉体的にそれ以上には進展しない。《いらん、いらん。……嫁入り前の娘がそんなことしたらいかんや》という初江の《道徳的な言葉》の前に、新治は簡単に断念し、語り手は、《新治の心には、道徳的な事柄にたいするやみくもな敬虔さがあつた》と解説する。

こうした《道徳》に、当時、文部省が進めていた〈純潔政策〉に

基づく婚前交渉の否定の反映をみる論者もいる。¹³ また、赤川学によれば、《一九一〇～二〇年代に、女性の（婚前の）純潔、処女性に対する価値が増大》し、一九六〇年代に入ると、《結婚するまでは男性も女性も純潔であるべきだ》という規範と、「愛し合つていれば婚前性交も可」という規範とが併存し、しかもそのどちらか一方が優勢になるわけではなく、どちらの規範に従うかは当人たちの選択次第とされるようになる》という。¹⁴ 「潮騒」が書かれたのは一九五九年であり、赤川の指摘する性規範のまさに移行期にあつた。敗戦後、性の解放が叫ばれ、一九五〇年代後半からは〈性典映画〉が続々と作られていったのであり、だからこそ、保守的にみえる新治と初江の選択が、もう一方の極の人々にとっては新鮮なものに映つたのだろう。¹⁵

舞台となる歌島は、こうした《道徳的》な規範が守られる島として仮構されている。《どんな時世になつても、あんまり悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまふ。海がなア、島に要るまつすぐな善えもんだけを送つてよこし、島に残つとるまつすぐな善えもんを護つてくれるんや》（六）という新治の言によれば、ここでも、周囲を海に囲まれた小島という環境が、善き道徳性を守っているのだ。また、女を買った安夫は、千代子にほのめかそうとしてやめる。《ふつうの農漁村なら、安夫が女を知つてゐることは、自慢話の種になる筈だつたが、清浄な歌島では、彼は固く口をつぐみ、こんな若さで偽善者を気取つてゐたのである》（七）。歌島は、《ふつうの

《農漁村》とちがった《清浄》な島だとされている。

こうした《清浄な歌島》像は、やはり虚構性の強いものと言えよう。歌島には《むかし「寝屋ねや」と呼ばれてゐた若い衆の合宿制度》である《青年会》(三)があるが、一般的に、「寝宿」「若衆宿」「若者宿」といった組織に付随されることが多いとされる配偶者探しや性的指南といった性的な側面は、きれいに廃除されていることが、柴田勝二によって指摘されている。¹⁶⁾作中の《青年会》は、新治に《公共生活》へのつながりと《一人前の男が肩に担ふべきものの快い重み》を味わせる以上の機能は持たされていない。また一般に、マツリの祝祭的時空間・ハレの場において、男女の関係が進展することもままあるわけだが、こうした行事も「潮騒」では設けられていない。このような慎重な設定により、《清浄な歌島》という舞台と、小説や映画によって前もって恋愛の作法を知ることのない若者が登場するのである。

では、歌島が、《道德的》で、猥雑などころのない、まったくの理想郷かという点、もちろん決してそうではない。閉鎖的な土地であり、《嗜好きの村人》たちによって、安夫のまいた新治と初江の関係の中傷は、瞬く間に村中に広がり、二人の中は引き裂かれる。ただ、こうした《噂》は、物語を進展させる契機として機能しており、無垢で《清浄な歌島》空間と併存している。

また、安夫が島の外で女を買っていたように、歌島丸の船長は港々に《女》をおいていた(二四)。善玉悪玉がハッキリとしている「潮

騒」の中で、船長は明らかに新治の成長モデルとして造形されている人物であり、こうした船の男の対女性関係は語り手によって許容されている。歌島の外にあっては男たちは、《清浄》なだけではないこと(外に出れば《清浄》ではなくなる)が作中で示されているのである。

さらに、歌島における男女の生活形態を見ておこう。

歌島では、男たちは蛸や槍烏賊などの近海漁業に従事しているほか、船舶による運搬業に従事する者もいる。新治の《簡素な空想は、将来自分の機帆船を持つて、弟と一緒に、沿岸輸送に従事することであつた》(二)。成功者である宮田照吉は二艘の機帆船を持つており、のちに新治が乗ることになる歌島丸の乗組員は、《歌島出身の人が殆んど》である(一四)。弟の宏が修学旅行に出かけたあと、母親は、《やがて二人の息子が自分を置いて海へ出てゆく日 pensando 泣》(七)いており、一家の中では新治たちが家を出ることが既定されている。歌島丸の乗組員を経て船長や照吉のようになることが、新治をはじめとする歌島の若い衆たちのいわば成長モデルだったのである。

対して、女性たちの生活ぶりにははっきりとはしないが、相当数の海女がいることは確かだ。夫に先立たれた新治の母親が、新治を高校にやることはできなかったにせよ、海女の稼ぎで何とか生計を立てていたように、彼女たちは一年のうちの数カ月で相応の稼ぎを得ている。

《食器を洗ひながら、母は息子が嵐のなかへまた出てゆく姿をじつと見た。彼女は敢て出先を尋ねなかつたが、尋ねさせない力が息子の後姿にはあつた。いつも家にゐて、家事を手つたつてくれる娘を、一人も生まなかつたことを彼女は後悔した。

男たちは漁へ出る。機帆船に乗つてさまざまな港へ荷を運ぶ。

さういふ世界の広がりとは縁がない女たちは、飯を焚き、水を汲み、海藻をとり、夏が来ると水に潜いて、深い海の底へと下りてゆく。》（八）

やがて外洋へ出て行き必ずしも《清浄》ではなくなる男と、《清浄》な島の周囲の海の世界に留まり仕事や家事をする女との対比が描かれている。語り手は、男と違つて女たちは《世界の広がりとは縁がない》と言う。男女の乖離の様相は、語り手の示す「潮騒」の歌島という仮構空間・共同体のジェンダー観の内側にあらかじめ埋め込まれているのである。

五 新治と初江の表象

— 「男らしい」「若者と」「女らしい」と表現された ぬ娘との恋愛譚

では、具体的に新治と初江の上にはどのようなジェンダー表象がなされているだろうか。

気づかされるのは、新治の態度の説明に「男らしい」という表現が頻出していることである。

観的哨で道に迷つた初江に出会つた新治は、《日頃の男らしい態度を取戻して》（四）送つていくことを申し出る。初めての接吻のあと、《あしたは漁からかへつたら、台長さんのところへ魚を届けにゆく》／新治は海のはうを見たまま、威厳をつくるつて、男らしい態度でさう宣言した》（五）。安夫のまいた悪い噂に腹を立てる龍二に対して、《さうか》／新治は男らしく黙つて笑つた》（二〇）。嵐のなか二〇メートルを泳ぎきつて命綱を浮標に結ぶ仕事をやりとげ船の甲板に戻つたときには、《氣を失ひさうな疲労を彼の男らしい氣力が支へた》（一四）と語られる。

頻出する「男らしい」の表象は、しかしながら、例えばどのような態度が《男らしい態度》なのか、実態が必ずしも明示されていない。語り手は、喩の内実よりも、新治に「男らしい」のレッテルを張ることを重視したのである。¹⁷

「男らしさ」が、新治の口から説明されている箇所もある。《そいで泥棒一人もねえこの島には、いつまでも、まごころや、まじめに働らいて耐へる心掛や、裏腹のない愛や、勇氣や、卑怯なところはちつともない男らしい人が生きとるんや》（六）。《清浄な歌島》と男らしさが一体化して語られており、こうした傾向は他の登場人物にも存する。新治の従事する船の漁労長・大山十吉は、《我慢が肝腎や》、《正しいものが、黙つてゐても必定勝つや》（一一）と言

い聞かせる。説かれているのは、正直・忍耐・倫理・勇気である。

また、初江の父・照吉は、歌島丸に試乗させての婿選びの末、『男は氣力や。氣力があればええのや。この歌島の男はそれでなかいかん。家柄や財産は二の次や。さうやないか、奥さん。新治は氣力を持つとるのや』(一五)と、新治を婿に選んだ理由を説明する。歌島の男の条件は、こうして各世代に共有されており、『男らしい』新治はめでたく年長者のメガネになかったわけである。このように、いわば同じ倫理的価値観を共有する歌島の男たちは、『男の約定』(一一)という男性同盟によって結ばれているのである。

では、初江は、歌島の女性たちは、どうなのか。不思議なことに、初江に対して「女らしさ」と表現した箇所はあまりない。灯台長の奥さんの目から初江は、『無口で愛嬌がないかと思へば、急に娘らしく笑ひ出し、ほうつとしてゐるやうであつて、なかなかよく氣がついた』(六)と評され、「娘らしく」笑うとは描かれている。しかし、新治の性行が「男らしさ」という語彙で繰り返し明示されるようには、初江は「女らしさ」の語で彩られることはない。初江に対しては、新治の「男らしさ」に相当する鍵語が見いだせないのである。

新治が将来の夢をとつとつと語ったとき、『初江は答へなかつたが、いちいちうなづいた。決して退屈してゐるとは見えず、表情にはいつはりのない共感と信頼があふれてゐて、それが新治を喜ばせた』(六)。氣立てがよく、相手に共感と信頼を与える、よい聞き手

だとプラス評価されているが、鍵となる語はやはりない。どうやら、「潮騒」の語り手にとつては、初江は「女らしい」とは認定しがたかつたようのだ。

初江は、海の女であり、服装も粗野な、鄙びた美しさの娘である。海女の腕もたしかで、歌島一の海女である新治の母親を負かしている。しかし学業に劣っていた新治と同様、彼女の書く手紙は『便箋にはじめ万年筆で書き出したのが、二三行してインキが尽きたらしく、うすい鉛筆の字につづいてゐる』ような洗練からほど遠い『稚拙な字』(一一)である。おそらく、こうした初江の属性は、『潮騒』の語り手の保持している「女らしさ」の範疇に充当しなかつたのだろう。¹⁸⁾

女性たちが集団で登場している「乳比べ」「アワビ取り競争」の場面(一三)は、海女を登場させることによるエキゾチックな彩りが強いのだが、初江が新治と肉体関係を持っていないことが年配の目利きの女性集団によって確認される。『この乳房を見た女はもう疑ふことができない。それは決して男を知つた乳房ではなく』といった記述が、語り手によってなされている。¹⁹⁾ また、鮑取り競争では初江の謙讓の美德が強調された末に、新治の母親との和解が成立し、『島の政治はいつもかうして行はれるのだ』と語り手は書く。ただ、この『島の政治』とはあくまで島の内側だけの世界であつて、男性たちのように内と外の二重の世界にまたがるものではない。

このように、歌島においても、新治と初江の表象においても、男

女の世界の乖離は明確に描かれており、それこそが共同体の論理なのである。

《少女の目には矜りがうかんだ。自分の写真が新治を守つたと考へたのである。しかしそのとき若者は眉を聳やかした。彼はあの冒険を切り抜けたのが自分の力であることを知つてゐた。》（一六）

この結末部分は、近年、それまでの物語世界とは別の違和を感じさせる場面だとされてきた。ハッピーエンドな愛の完結にふさわしくない、新治と初江との食い違いが突然表れた箇所だと読まれてきたのである。だが、これまで検討してきたように、実は、結末部分においてはじめて物語が両者を突き放したのではない。女は男との関係に自足して島に残り、男は自分の力を信じて外へ目を向ける。こうした男女の乖離こそが、語り手が呈示する、『清浄な歌島』の、すなわち《既成道徳》の側のジェンダー秩序なのであった。語り手は、それまで伏流していた二重性を最後に顕示して物語を閉じたのであつて、決して、結末において急に違和が登場したわけではないのである。

おわりに

さて、こうしてみると、「潮騒」は、「男らしい」若者と「女らしい

くはない娘との、男女の世界の乖離を底に秘めながらも、一応は幸福な恋愛譚だと言えよう。さすれば「潮騒」は、やはり「仮面の告白」と対照的に作られた作品だと言える。

「仮面の告白」とは、いわば「男らしくない」若者と「女らしい」娘の恋が結ばれなかった物語として読めるからである。「仮面の告白」の主人公「語り手（私）」は、同性愛指向という自らのセクシュアリティにも悩むが、それに伴って、「女らしい」娘との関係の中で自らに向けて暗に欲求されてる「男らしさ」という男性役割を果たせないことに苦悩する。友人の妹・園子に精神的な愛を持つものの、肉感を感じないこと、男性役割の最終ゴールたる結婚へと踏み込めないことの苦悩が、作品において重要なテーマとなっているのである。

「仮面の告白」において感受性の苦しみをナマの形で描き、「禁色」ではいわば開き直る形で同性愛指向を描いたものの、その底にはやはり不安や苦みが存在した。両作品は、社会からの疎外意識、社会への抵抗意識の産物であった。「潮騒」はそうした二作のあと、ギリシャ体験を経て、ようやく生み出された作品である。ギリシャで感得した、社会と融和した幸福なホモセクシユアルな愛を描くのが理想であつたにせよ、インタビューでの男子高校生の発言に顕著なように、いまだ同性愛嫌悪が激しい日本社会において、ホモセクシユアルを扱うには、疎外や抵抗を描く「仮面の告白」か「禁色」のような方向しかありえなかった。だが、三島は、ギリシャで体得した、

社会に完全に包み込まれた幸福な愛の物語を描きたかった。だとすれば、現代の日本社会では異性愛の物語として設定せざるをえなかっただろう。その底流に男女の世界の乖離も潜ませているのである。それと同時に、「私」と園子の愛の顛末の完全な裏返しをやることによって、あり得なかった「仮面の告白」の一面を描いたのではなからうか。²¹⁾裏返しとはいえ、これは三島にとっては、痛切な主題であり、「仮面の告白」や「禁色」を裏返す作品を書くことによって、自らを治癒することが必要だったのではないか。

だが、「潮騒」は、そうした切実なテーマを読み取られることなく、清新で単純な青春小説として称揚されることとなった。《潮騒》の通俗的成功と、通俗的な受け入れられ方は、私にまた冷や水を浴びせる結果²²⁾になった、と三島は書く（「私の遍歴時代」昭和三八年）。あらかじめ与えられた手本と現実との齟齬に苦しむ小説のあと、新治と初江の教科書のない愛の物語が代表的な青春として長く愛読され、教科書にも掲載されたのも、皮肉なことなのかもしれない。

〔付記〕「潮騒」の本文は『決定版三島由紀夫全集4』（新潮社、二〇〇一年）により、ルビは適宜省略した。

〔注〕

（1）『物語芸術論』「物語を支えるもの 三島由紀夫」講談社、一九七九年

（2）『三島由紀夫』とはなにもものだったのか』第三章「女」という方法」新潮社、二〇〇二年↓新潮文庫

（3）『川端康成・三島由紀夫 往復書簡』新潮社、一九九七年

（4）『三島由紀夫 エロスの劇』第九章 同性愛から異性愛へ』作品社、二〇〇五年

（5）昭和三十九年五月二十九日、NHKラジオ放送。聞き手・石倉秀樹・福田洋子（↓CD『昭和の巨星 肉声の記録』文学者編 大岡昇平・坂口安吾・三島由紀夫』NHKソフトウェア）。文字起しは私により、「あの」「うん」等の感動詞は適宜省略した。

（6）松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』「ギリシヤ」の項（勉誠出版、二〇〇〇年）

（7）「小説家の休暇」（昭和三〇年）では、『潮騒』には根本的な矛盾がある。あの自然は、協同体内部の人の見た自然ではない。私の孤独な観照の生んだ自然にすぎぬ」と述べられている。

（8）花崎育代『三島由紀夫『潮騒』考―麻績王とテキ王子』（『湘南短期大学紀要』九、一九九八年三月）では、「テキ王子」挿話によって、「潮騒」が新治の貴種流離譚としての相貌を持つことを述べており、作品末部の「新治変貌」にも触れられている。

（9）歌島丸に乗った新治の活躍が沖縄でなされたことについては、モデルが存在することが明らかになっている（落合恭子『潮騒』現地調査―三島由紀夫を訪ねて』昭和学院国語国文』二六、一九九三年三月。山口政幸『潮騒』の島―神島の現地調

査を踏まえて『昭和学院短期大学紀要』三二、一九九五年三月）。
 両氏の現地調査によれば、三島が神島取材中に宿泊していた寺
 田家の長男・寺田和弥の体験に基づくものであり、『決定版三島
 由紀夫全集4』所収の「潮騒」創作ノートによって、三島が取
 材した事実が裏付けられた。

また、柴田勝二は、「潮騒」に対米従属から日本を断ち切るヴィ
 ジョンを見ており、舞台がアメリカ統治下の（沖繩）であるこ
 とを重視している（『三島由紀夫―魅せられる精神』「第二部Ⅲ
 二つの太陽―『潮騒』の寓意」おうふう、二〇〇一年）。

新治の活躍の地が沖繩に設定されているのは、一つには、ア
 メリカ施政権下にある当時の沖繩が最も近い（外地）であり、
 新治の外・未知への志向にかなったからではないか。

- (10) 「潮騒」の語り手については、すでに諸氏による分析がある。
 磯貝英夫は、『描写と説明と自由に交流』し、『完全に作品の上
 に立った作者が、型どおりに話をおし進めてゆく』《語りもの》
 であると言う（『潮騒』『国文学』一九六五年一月号→『戦前・
 戦後の作家と作品』明治書院、一九八〇年）。また、佐藤秀明は、
 語り手が分節化された島の内外の両側を知っていることや、観
 的哨での抱擁場面における語り手の導きと読者の心理を丁寧に
 分析している（『初恋』のかたち―三島由紀夫『潮騒』のプロッ
 トと語り手』『解釈と鑑賞』一九九一年四月号）。

(11) こうした愛の形について、佐藤秀明は、『恋愛』という概念

があらかじめインプットされている現代人からすれば、およそ
 現実的ではない』にもかかわらず、『愛はかつてはかくもありえ
 たであろうし、もしやどこかでありうるかもしれないという可
 能性を信じさせる力がこの作品にはある』と説明する（注10）。

- (12) 拙論『仮面の告白』試論―ある、厭世詩家と女性』（『近代文
 学試論』二四、一九八六年二月）、『三島由紀夫文学における性
 役割―男性性を中心に』（『金城国文』六八、一九九二年三月）。

- (13) 九内悠水子『三島由紀夫「潮騒」論―「潮騒」のダブルモラル』
 第三二回広島近代文学研究会（二〇〇六年五月一三日・県立広
 島大学）の口頭発表。

- (14) 『セクシュアリティの歴史社会学』「第二章6 純潔／処女
 ／童貞規範の変容」勁草書房、一九九九年。こうした六〇年代
 の性規範を象徴するものが、河野実・大島みち子のベストセラ―
 『愛と死をみつめて』（一九六三年）であったことを、赤川や、
 藤井淑禎『純愛の精神誌』（新潮社、一九九四年）などが指摘し
 ている。

- (15) 出会いや性関係の遅延という点では、一九五二年のラジオオ
 ラマ「君の名は」ブームも影響しているかもしれない。三島文
 学では、「潮騒」後の「永すぎた春」（昭和三十一年）も同じ系譜
 の作品である。だが、三島は一方で、性の解放に沿う「美德の
 よろめき」（昭和三十三年）なども書いており、ジャーナリストイッ
 クな感覚を働かせて、当時の性規範の両面をとらえた作品を量

産している。

(16) 注9論文。

(17) 杉本和弘は、『本来その内実のあいまいな「男らしい」という、語り手の新治を讃える形容詞は、(中略)まさに「歌鳥」の「男らしい」という意味で、「歌鳥」の倫理そのものを明示する語であろう』と言う(「潮騒―「歌鳥」の物語」『中部大学国際関係学部紀要』六、一九九〇年三月)。

そして、『清浄な歌鳥』の中にあつて、認識に汚されることなく肉体労働をし、道徳的な規範を守っている新治は、きわめて美しく語り手に描写される。三枝和子は、『男性の書いた恋愛小説でこれほど男の美しさに筆を費やした小説も珍しい。そして、こうした恋愛小説の出現によって、女性の読者は、男性を鑑賞するといふ、これまでにない愉しみを与えられるのである』と述べている(「三島由紀夫の二重構造」『ユリイカ』一九八九年一二月号↓『恋愛小説の陥穽』青土社、一九九一年)。

(18) 新治の母親は、『料理を何も知らない。刺身にするか、酔のものにするか、それとも丸ごと焼いてしまふか、煮てしまふかするだけ』であり、『ろくに洗はないで煮るものだから、魚肉を噛む歯はしばしば砂を一緒に噛んだ』(二)。都会で暮す専業主婦のように繊細に料理をするわけではない、女性の姿が描かれている。

関礼子は、三島のテキストは、『フェミニストでさえ肯定した

くなるような女性的なるもの』の形象化と『その後の物語の論理への強引な回収』という動線を描くと述べている(「フェミニニティとその回収―「仮面の告白」「潮騒」「美徳のよろめき」『国文学』一九九三年五月号)。

(19) 赤川学(注14)論文では、女性の純潔を判別する手段として『処女膜』や『性交反応説』が出版物に頻繁に登場するものの、科学的に明確に否定されたため、『女性の処女性を科学的に鑑別したいという欲望は、こうして無化されていく』と述べる。ところが、『潮騒』では、乳房の形によって処女性が共同体の中で証明されるといふ、やや驚くべき設定となっている。山口政幸が、神島の現地調査を踏まえ、三島は『現実の海女よりも、自らの観念の中で作り上げた海女像を提出しようとしている』と言いつ、この箇所についても『男を知った乳房』と『処女の乳房』のとの、外見上の識別も可能とする』のは、『そうした差異を信じようとする三島の意識の集中作用による』と述べている(注9)。

(20) 助川徳是「潮騒」(「解釈と鑑賞」一九七二年二月号)、杉本和弘(注17)、花崎育代(注8)などが、結末部分の違和について考察している。

(21) さきごろ完結した『決定版三島由紀夫全集』補巻には、短編小説「愛の処刑」が掲載された。「愛の処刑」は、男性同性愛者の会「ADONIS」の別冊「APOLLO」(五、一九六〇年)に榊山保の名で掲載され、発表当初から三島由紀夫が偽名で書いた

ものではないかと囁かれながら、三島作かどうか不明だった作品である。全集解題によれば、「このほど、中井英夫のもとに残されていた三島自筆の大学ノートが発見」されたために、これを底本として収録したとのことである。また、堂本正樹も、「愛の処刑」は三島作であり、三島の筆跡を残さないために堂本が代筆したことを証言している（『回想・回転扉の三島由紀夫』『文学界』二〇〇〇年一月↓『回想 回転扉の三島由紀夫』文春新書、二〇〇五年）。二・二六事件に加われなかった中尉が妻とともに自決する「憂国」（一九六一年、映画版は一九六六年）は、三島が偏愛ぶりを語っていた作品だが、「愛の処刑」は、切腹をモチーフを含むなど、「憂国」にストーリーが酷似し、しかし男―女関係が男―男関係へと置き換えられているのである。「憂国」―「愛の処刑」の件では、三島文学において異性愛小説が同性愛小説の代替として制作された様相が明らかになった。

結婚後、アングラな世界と強制異性愛社会の二つの社会に生きようとした三島の様相に関しては、拙論「三島由紀夫『鏡子の家』におけるジェンダー化した〈語り〉」（『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報』四八、二〇〇一年二月）で述べた。また、橋本治（注②）も、『三島由紀夫は、「女」という方法を使って、自分自身の「幻想の私小説」を書いてきた』と述べている。

A Study on Yukio Mishima's "*Shiosai*" (*The Sound of Waves*)

Nobuko ARIMOTO

"*Shiosai*" (*The Sound of Waves*) is well known as one of Yukio Mishima's masterpieces, and generally loved by myriads of readers. On the other hand, it is also regarded as an idiosyncratic opus differing in its main themes from his other literary works, and Mishima himself admitted this fact as well.

In this paper, while attention is paid to Mishima's remarks, the peculiarity and significance of "*Shiosai*" is analyzed in terms of gender/sexuality and narration. Mishima used to depict alienation and a sense of the resistance of the society towards homosexuality in his previous other works; but in "*Shiosai*" he not only delineates heterosexuality, but also expresses it as a kind of love that is surrounded by the society and should be blessed as well. By searching for the logic of community that acts as the background of the story and the issue of sex/gender between male and female protagonists, the method adopted by the narrator to construct and present the story of heterosexuality which is encircled by society is examined, and the position of "*Shiosai*" in Mishima's oeuvre is then clarified.